

統語論・意味論・形態論の研究(1)

西岡 宣明

近年の研究は、各分野の専門性、技術性が一層高まり、関係学会も細分化しつつあるが、日本の英語学研究の中心的役割を担っているのはやはり日本英語学会である。2017年4月に明治学院大学で開催された第10回日本英語学会国際春季フォーラムでは、Olga Fischer氏を含む3名の招待発表の他に、22件の口頭発表ならびに、3件のポスター発表があった。すべてを英語で運営し、若手の育成のために創設されたフォーラムであるが、10年目を迎え、国際学会としての地位を徐々に確立しつつあるといえる。また、2017年11月には、日本英語学会第35回大会が東北大学で開催され、5つのワークショップ、37件の口頭発表ならびに、6つのシンポジウムが行われた。

日本英語学会機関誌 *English Linguistics* は、2017年度に2巻刊行され齋藤衛氏の招聘論文を含む、7本の研究論文と、16本の書評が掲載された。研究論文の著者と題名は以下のとおりである。(Invited Article) Mamoru Saito “Notes on the Locality of Anaphor Binding and A-Movement”, (Articles) Tomonori Otsuka “Radical Free Merger”, Tetsuya Matsuyama “Transparent Free Relatives as Specifying Coordination”, Jun Omune “Reformulating Pair-Merge of Heads”, Shin-ichi Tanigawa “Agreement, Labeling and Sentential Subjects”, (Brief Articles) Masako Maeda “Ellipsis as Topicalization in Derivational Cartographic Structures”, Yohei Takahashi “A DP Movement Approach to Relativization from VP Idioms: Toward a Unified Approach”. そして、招聘論文を除く上記の論文の中から、2017年度の *EL* 論文賞には Tomonori Otsuka “Radical Free Merger” が選ばれた。この論文は、近年の生成文法のミニマリスト分析において構造構築の基本操作である Merge に関して、従来 adjunct の派生のためのものとして想定されてきた Pair-Merge を、argument の merge にも自由に適用する Radical Free Merger の必要性を提案したものである。これは、Merge の適用を最大限に自由にする提案であり、Chomsky (2013, 2015) に基づく近年のミニマリストモデルの理論的発展において導出されたものであり、理論的に大変興味深い示唆的結果と、さらなる発展性をもたらす可能性をひめた論考である。

日本英文学会では、全国大会で近年英語学分野の影が薄くなりつつある。2017年5月に静岡大学で開催された日本英文学会第89回大会では、英語学関係は、3件の口頭発表と3つのシンポジウムのみであった。また、2017年度に刊行された日本英文学会機関誌『英文学研究』(和文)には英語学関係の7本の書評があるが、研究論文はなかった。しかし、英文号の *Studies in English Literature* には英語学関係の6本の書評

に加え、Shin-ichi Tanigawa “In Defense of the Vacuous Movement Hypothesis for *Wh*-Subjects: Perspectives from the Framework of Chomsky (2013, 2015)” と Michiko Ogura “Compound Reflexive as a Metrical Filler, or *Self* in *Himself* used as an Alliterating Element?” の 2 本の研究論文が掲載され、一矢報いた感がある。

学会ではないが、著名な研究者や伸び盛りの若手にまとまった分量の発表の機会を与える「慶應言語学コロキウム」も特筆に値する。2017 年度は Daniel Seely 氏や Charles Yang 氏といった海外からの著名な研究者の講演を含め、計 8 回開催された。日本における生成文法の若手研究者の育成に地道ながらその貢献度は大きいと言える。

さて、単行本に話を移すと、2017 年度は本分野では出版数が多いとは言えないが、質的には充実した内容のものが多い。

まず、開拓社の言語・文化選書から出版された 2 冊。

一冊目が、大室剛志著『概念意味論の基礎』である。本書はジャッケンドフ (Ray S. Jackendoff) により提唱されている概念意味論 (conceptual semantics) を著者の言葉で丁寧に解説したものである。意味論として認知意味論や形式意味論が近年日本でも盛んに研究され、注目されているが、純粋に生成文法における意味研究は残念ながらそれほど知られていない。その中での本書の意義と貢献は大きいといえる。まず、統語論を中心にすえるチョムスキー理論との違いとして、音韻部門、統語部門、概念部門 (意味部門) の自立性と対等性に基づく 3 部門並列構成をとる生成文法の意味論としての概念意味論の立ち位置とその基本的なメカニズムが解説され (第 2 章)、さらに概念関数、意味素性、使役の概念に基づく具体例が丁寧に説明され (第 3 章)、統語形式と概念構造との対応 (linking) の問題が示される (第 4 章)。具体例のすべてが英語の例であり、和訳付きの例文と対応する概念構造の解説もわかりやすい。様々な英文の意味をいかに一般性と簡潔性をもって捉えうるのかを深く考えさせられる英語学に興味のあるすべての方にぜひ読んでいただきたい一冊である。

もう一冊が、中島平三著『斜めからの学校英文法』である。本書はタイトルが示す通り、学校英文法に関わる教員、あるいは教員を目指す学生や英文法に興味のある方々にはお薦めの「目から鱗」の一冊である。生成文法を全く知らない読者にもわかりやすい平易なことばで、随所に生成文法の知見が盛り込まれており、英語学で生成文法を勉強したことのある読者は、その復習になるだけでなく、その知識と高校までに習った英文法の知識がみごとにつながる。特に、助動詞と主語に基づく文 (節) の一般性を示した第 4 章、5 章、従来、別物として扱われている動名詞と現在分詞を不定詞の名詞用法、形容詞用法、副詞用法とパラレルに名詞用法に相当する *ing* 形が動名詞で形容詞用法、副詞用法に相当するのが現在分詞であることを説得力をもって展開する第 8 章、不定詞と動名詞の分布の違いを両者の意味の違いから導出する第 10 章、11 章、受動文に照らした新たな他動詞の分析を紹介する第 12 章は学校英文法が見落とし

回顧と展望

ている大きな視点から（著者の言葉では「斜めから」）の考察の醍醐味がいかんなく発揮されている。長年、日本の英語学界を牽引してきた生成文法学者による本書は、英語学・言語学の知識が学校の英文法教育にいかにかき入れられるのかをみごとに実証し、学生の「英文法は暗記するだけのつまらないもの」という広く行き渡った通念を覆す一冊である。

さらに、開拓社からの単著をもう一冊、阿部潤著『生成文法理論の哲学的意義』は生成文法の根源的な考え方をチョムスキー (Noam Chomsky) の *New Horizons in the Study of Language and Mind* (2000) と *Cartesian Linguistics* (1966/2009) の内容に基づき丁寧に解説したものであり、生成文法の哲学的理念を学ぶのによい一冊である。その内容は、「社会的・文化的共有財産としての言語」、すなわち外在的言語ではなく、人間の頭の中にある無意識の知識である内在的言語を研究対象とし、自然科学の一部とする生成文法の基本的な考え方を述べた1章に続き、2章では、言語研究に対して、反自然主義的立場（「方法論的二元論」）ならびに外在的アプローチをとるパットナム (Hilary Putnam) のテーゼに対して、チョムスキーの生成文法の立場からの反論が展開される。この際、ウィトゲンシュタインのパラドクスを巡るクリプキ (Saul Kripke) の論、パットナムの語の意味に対する見解、デビッドソン (Donald Davidson) の「暫定的理論」、サール (John R. Searle) の言語使用を重視する立場からの反論を退け、生成文法の言語使用から切り離れた、内在的言語のモジュラー的アプローチの妥当性が論じられている。さらに3章では、全体主義的認識論の立場をとるクワイン (Willard Van Orman Quine) の観察、類推に基づく言語分析、経験・行動主義に基づく言語獲得分析に対して、チョムスキーの引用を用いて反論し、生成文法の内在的、自然主義的アプローチがとる生得的言語機能の想定と言語獲得、言語の普遍的特性に対する見解を明らかにする。4章では、デカルトの「精神」と「身体」の区別（心身問題）に対する行動主義、唯物主義、機能主義に反し、抽象化されたレベルでの研究を通して物理学や化学との「統合」を目指す心理主義をとる生成文法の立場を論じる。最終章では、生成文法のデカルト派言語学との違いについて生物学的立場を述べて結んでいる。

2017年度には複数の著者により、多領域から言語学全体を眺望し、その動向と課題を提示するすぐれた図書も出された。

西山佑司・杉岡洋子（編）『ことばの科学——東京言語研究所開設50周年記念セミナー』（開拓社）は、副題にあるように2016年9月に開催された東京言語研究所50周年記念セミナーでの講演に基づく内容のものである。「日本語はどのような言語か——内から見た日本語、外から見た日本語」と題する第I部では、まず、影山太郎氏が膠着性と定形性の観点からの複合語の分析を通して、言語研究の新たな視点と面白さを提示した啓蒙的な内容の「複合語の小宇宙から日本語文法の大世界を探る」、そして、話し手の心的態度を表すことが日本語の特徴の一つであることを指摘し、「～ている」

「～である」表現の分析を通して語用論的、機能論的論考の重要性を示した高見健一氏の「『話し手』考慮の重要性と日本語——『～ている』と『～である』表現を中心に」が続く。第II部は将来への課題と題して、「音韻論の課題——類型論的観点から見た日本語の音韻構造」で窪園晴夫氏が有標性の概念に基づき類型的観点から日本語の母音と子音、音節とモーラ、音節構造の位置づけを述べ、今後の課題を提示している。それに続き「日本語学の課題——『記述』と『理論』の壁を越えて」で三宅知宏氏が日本語学の「記述」中心の研究と生成文法、認知言語学の「理論」研究との「壁」を乗り越えた相互活性化への提言を行っている。そして「社会言語学の課題——ことばの選択を考える」で嶋田珠巳氏が「ことばの選択」という概念を基に社会言語学の概要と課題を展開する。続いて「生成文法の課題——人間の言語機能の解明に向けて」で高橋将一氏が構造構築の中核である「併合」操作に関する制約を経験的データに基づき解説し、さらなる課題を提示している。そして、「認知言語学の課題——文化解釈の沃野」で大堀壽夫氏が認知言語学の解釈学的言語学の可能性と有用性を論じている。いずれも多くの示唆に富み、刺激的な内容の論考集であり、昨今、時として技術的な側面に目がいく研究が多い中、専門を異にする方々にもぜひ通読をおすすめしたい。

また、畠山雄二編『理論言語学史』(開拓社)は、生成文法、認知言語学、形式意味論、生物言語学の各方面についてコンパクトに要点がまとめられた良書である。まず、本田謙介・田中江扶・畠山雄二の三氏による第I部で生成文法の初期理論から障壁理論までの発展の経緯が具体的に問題点の指摘とともに解説されている。特に興味深いのは過度の一般化と抽象的な分析(第二部の極小主義分析)に対する著者たちの警鐘的なコメントである。藤田耕司氏による「経済性理論から極小主義まで」と題する第II部では、極小主義に至る背景と極小主義のこれまでの理論的展開が基本概念の説明とともに解説されて現在の生成文法の流れがよく理解できる。今後の課題の指摘もあり、最新理論に興味のある学徒には技術的側面だけではなく、その立ち位置を知るにも有益である。第III部は、酒井智宏氏による認知言語学の解説である。構造主義から生成文法への言語理論の発展の経緯、生成意味論から認知言語学への理論言語学の流れがうまくまとめられていて、認知言語学の解説もわかりやすい。惜しまれるのは認知言語学自体の問題点、今後の課題の指摘の不足である。認知言語学に興味のある読者には生成文法への攻撃より、むしろそちらがありがたい情報であるように思える。第IV部は藏藤健雄氏による形式意味論の解説である。率直に言って、素人には形式意味論の難解さは免れ得ない。(特に認知意味論と比較するとその印象は強い。)しかし、技術的側面は別として、形式意味論がどのような問題と取り組み、どこまで明らかになっているのか、また今後の展開が理解できる。第V部は尾島司郎氏による生物言語学の解説である。進化、言語起源、言語獲得と脳科学といった点から、近年脚光を浴びている生物言語学の発展の経緯と現状が生成文法との関連でうまく解説されている。

回顧と展望

さらに、畠山雄二編『最新理論言語学用語事典』（朝倉書店）は「森を見て木を見る」ことをねらいとし、多岐に専門化した最先端の言語学の諸概念を解説することによって、言語学の今後の方向性を読者に示すことを目的としている。1. 認知言語学（黒田一平、谷口一美、宇野良子、木本幸憲、貝森有祐、田丸歩実）、2. 機能文法（田中江扶、本田謙介、畠山雄二）、3. ミニマリスト・プログラム（寺田寛、小林亜希子）、4. 形式意味論（今仁生美、藏藤健雄）、5. 言語獲得（鈴木孝明）、6. 生物言語学（藤田耕司、岡ノ谷一夫）、7. 主要部駆動句構造文法（田子内健介）、8. 言語哲学（酒井智宏）、9. 日本語文法（本田謙介、田中江扶、畠山雄二）、10. 構文文法（貝森有祐、谷口一美）の各領域に亘りそれぞれ、20項目の主要概念を説明し、今後の課題が述べられている。本書も理論言語学の様々な専門領域を概観するのに有益な一冊である。

以上のように2017年度は教育的、啓蒙的な図書が多かったが、本分野での独自の研究書として、ひつじ書房から出された Makiko Mukai 著、*A Comparative Study of Compound Words* がある。本書は、著者が2006年に University of Newcastle に提出した博士論文に基づくものであり、英語、日本語、スカンジナビア諸語（Mainland Scandinavian languages）の豊富なデータを用いて複合語は統語的に形成されるものであることを Chomsky（1995, 2000, 2001）の枠組みを用いて論じたものである。まず、1章で生産性の定義と形態論と統語論の平行性が論じられ、続いて、2章では、英語、日本語、スカンジナビア諸語における名詞-名詞複合語に関する類似点と相違点が様々なタイプの複合語について指摘され、複合語と対応する句との語彙的完全性（Lexical Integrity）の問題が論じられている。そして、3章での先行研究の批判的な吟味の後に、4章で代案となる分析が提示されている。この分析では、複合語の右側要素が範疇素性（ $P(x)$ ）と併合し、 $P(x)$ は D/DP から指示素性をもらうまで（ x の素性が満たされるまで）、他の要素と併合を続けて主要部となるとするメカニズムが提案されている。また、複合名詞は他の複合名詞の語基（base）となるためより大きな回帰複合語（recursive compound）が形成され、右枝分かれ回帰複合語は、 $P(x)$ と語根（root）との併合を繰り返し生じ、他方、左枝分かれ複合語は左要素の語根と併合した $P(x)$ を照合するために連結形態素が用いられることが主張されている。洞察に富む力作であるが、ミニマリスト・プログラムの進展（特に Chomsky 2013, 2015 のラベリング）に照らしたアップデートがどのようになるのかの疑問が残ることと、例文の引用番号や注の引用等のミスが散見されるのが惜まれる。

最後に、退職記念図書を2冊。

『外国語の非-常識——ことばの真実と謎を追い求めて』小笠原真司、廣江顕編（英宝社）は、九州大学を定年後、長崎大学言語教育センター長を務められた稲田俊明教授の長崎大学のご退職を記念して刊行された本である。執筆者は長崎大学の同僚、九州大学での教え子の14名で、英語学・言語学関係6篇、言語習得論2篇、コミュニ

統語論・意味論・形態論の研究(1)

ケーション論2篇、文学2篇、英語教育2篇の内容である。一般の読者を対象として、平易に書かれており、どれも楽しく読める。英語学・言語学のものとしては、廣江颯「分詞構文に関する非-常識」、松元浩一「二重目的語構文の受動文——今と昔」、谷川晋一「ひっくり返すとどうなるの?——倒置文の機能と法則」、稲田俊一郎「空所の穴埋めとことばの仕組み」、徐佩伶「はじめての日中対照言語学——語順と構造」、水本豪「「反比例」ってどんな関係?」がある。

もう一冊は、『ことばを編む』西岡宣明、福田稔、松瀬憲司、長谷信夫、緒方隆文、橋本美喜男編(開拓社)である。本書は、熊本大学登田龍彦教授の定年退職を祝し、友人、同僚、教え子が寄稿した40篇の研究論文集である。英語学・言語学関係のみを挙げると、4篇の特別寄稿論文の中には大室剛志「同族目的語の修飾要素の義務性と付加詞規則」、上田功「等位節省略再訪」、Hiroko Saito “A Longitudinal Study of L2 English Intonation — Does Studying Abroad Make Any Difference?”があり、一般寄稿には統語論・言語習得として、阿部幸一「V2 から残留 V2 へ」、一瀬陽子、團迫雅彦、木戸康人「韓国語母語話者日本語学習者及び中国語母語話者日本語学習者における統語的複合動詞の習得」、Yusaku Oteki “Minimality Effect in Early Child English Grammar”, 加藤正治「“There + Modal + Subj + V”の構文について」、Norio Suzuki “Notes on *Tough*-Construction: A *Third-Factor* Approach”, 西岡宣明「日本語の否定の作用域とラベリング」、Minoru Fukuda “Upward Inheritance of Phasehood”の7篇、音声学・音韻論・形態論として、太田聡「日本語複合名詞のアクセントについて」、小野浩司「母音融合と同化」、高橋勝忠「N-less-ness と N-less-ly の派生について」、Eiji Yamada “Plato’s Problem and Recursiveness in English Word Stress Theory: The Case of *SPE*”の4篇、意味論・語用論・機能論・語法として、大竹芳夫「It is just that 節構文に観察される発話休止と情報補完」、大橋浩「同族目的語構文と副詞構文——コーパスに基づく分析」、緒方隆文「二重目的語構文と意味のネットワーク」、木原美樹子「疑似目的語結果構文と修辞性」、小深田祐子「名詞の意味機能からみる所有構文の定性効果」、長谷信夫「Everything 再び」、濱崎孔一廊「Be 動詞を含む英語の疑問文形成方法は特殊なのか」、Haruhiko Muraio “Distribution of Transitive/Intransitive Constructions in Japanese and English”, 八幡成人「The other day の語法」の9篇、その他、方言学・文体論・文学各1篇ずつ3篇、英語教育関係13篇と多岐に渡り、登田教授の人脈の広さとお人柄が窺える一冊である。

(九州大学教授)